Intelligibility に関する一考察

広島大学大学院　岡　秀夫

I　はじめに

昨年の中学校の指導要領改訂で新しく生まれた大きな特徴の中に，「時間数削減」・「多様化」と同時に「言語活動」があり，その意味する所をめぐって活発な論議が展開されている。指導書によれば，言語活動とは「言語を聞いたり，話したり，読んだり，書いたりするなど，言語を総合的に理解したり表現する活動」〔１：２２〕と解説されており，目標を言語の操作練習ではなく，音声と文字の両面に渡るcommunication(以下ＣＭと略す）の手段としての実際の言語の使用に置き，自己表現の能力を習得することを目指している。しかしながら，実際問題として，生徒に完全な正確さを要求するのは余りにも苛酷であり，正確さのみに注意を集中すれば，内容の面でそれ以上に欠けるものが生ずる。そこで，解決されなければならない問題は，到達レベルの問題であり，まず達成可能な一定の基準として'Intelligibility'（ＩＴ）を想定し，その定義づけと要因分析を進めて行きたい。

II　Intelligilility の定義

ITの発想に関しては，古くD. Abercrombie にまで遡り，彼は発音教授の目標として，ＩＴという限定された目標を提唱している〔２：１２０－１２１〕。それは，聞き手が殆んど苦労なしに理解できる発音（'a pronunciation which can be understood with little or no conscious effort on the part of the listener'）のことであり，逆に話し手の立場から見ると，話し手が自分のスピーチを容易に理解されうるものにすることを意味している。この考えを支持し，さらにそれをＣＭ全般にまで発展させたのが J.C.Catford である〔３：７－１５〕。彼はＩＴと effectiveness とを区別して考え，聞き手が理解しうるものであれば，つまり特定の言語共同体の意味習慣と合致していれば intelligible であるとし，話し手が発話によって意図した所の言語または行動による応答が得られた場合を effective であるとしている。このような視点からＣＭを考えると，言語学習者は自分の発話がその両方を満足させなければならない故に，intelligible 且effectiveでなければならず，ＩＴとは「ＣＭ場面において，話し手の発話が理解され得，聞き手がその発話により意図された反応を示すこと」である，と定義づけられよう。

それでは，このように定義づけられたＩＴの範囲はどのように設定されるのであろうか。ＩＴの尺度は，まず最低の境界線として 'communication breakdown'〔４：２４０〕が，また頂点には文法・意味の正確さ，さらにはそれらを実際に行使する際の発音・綴りの正確さなどを含むaccuracyが位置し，その中間に狭義のcorrectnessの段階，つまりunderstandable であり一応 grammatical である段階が存在すると考えられる。それ故に，ＩＴにとって最低条件は，話し手と聞き手の間の意志疎通が妨げられなければ良いということになり，そこから上にＩＴの尺度は伸びている。

III　Communication 過程における Intelligibility

ＩＴの喪失がＣＭ過程のどの段階で起りうるかを検討すると注①，まず第１に選択(selection)の段階で，話し手はその言語共同体の中で会話のレベルと場面に適切な言語形式を用いなければならない。換言すれば，適切な語い・形態・統語・音声を選択しなければならず，例えば語いの選択

を誤ったために意図した結果が得られず，ＩＴの喪失となる訳である。第２に実施(execusion)の段階で，話し手は選択された言語形式を正しい方法で実施に移さなければならない。さもなければ，誤った発音や綴りのためにＩＴの喪失が起る可能性がある。第３に，物理的な手段を通しての音声の伝達(transmission)ができるだけ完全でなければならない。例えば，電話の会話の場合に，伝達経路の欠陥によりＩＴがそこなわれてしまうことがある。第４に確認(identification)の段階で，聞き手は聞えた音と自分の心像とを正しく連合し，言語形式を正しく確認しなければならない。聞き違えによるＩＴの喪失はこの段階で生ずるものである。そして，第５に解釈(interpretation)の段階で，聞き手は聞いた言語形式を，その場面における適切な要素と連合させなければならない。つまり，その言語共同体の意味習慣に合致したように発話に対して反応しなければならず，解釈の失敗によるＩＴの喪失はこの段階で起る。

この５段階に渡るＩＴの喪失の可能性のうち，外国人学習者の場合，第３の段階は除外しても良かろうと思われる。なぜならば，音声の伝達は，話し手と聞き手の当事者ではなくて，外的条件によって強く影響を受けるからである。それ故に，ＩＴの喪失はＣＭ過程において，話し手の言語形式の選択，あるいはその実施，または聞き手の言語形式の確認，あるいは解釈のうちのどの段階かで起りうる可能性があり，ＩＴの達成のためには，それらが全て円滑に行なわれなければならない。これらの条件はＣＭ全体にとっては充分な条件ではないが，指導・学習の上で必要条件を示すものである。

注①

We may tabulate this somewhat oversimplified summary of points at which loss of intellibigility may occur as follows:

(1) Speaker's selection of linguistic forms.

(2) Speaker's execution of linguistic forms.

(3) Transmission from speaker to hearer.

(4) Hearer's identification of linguistic forms.

(5) Hearer's interpretation of linguistic froms.

〔３：１０〕

Ⅳ　Intelligibilityに含まれる要因

ＣＭ過程におけるＩＴの考察に基づき，話し手のencoding（選択と実施）と聞き手のdecoding（確認と解釈）の中に含まれる要因を抽出することが，指導面への配慮からも必要になって来る。話し手が自分の考えを形作り，実際の伝達の段階にまで持って行くencoding には，言語的に見て，意味・文法・音韻の３つの要素の記号化が遂行されると思われる〔５：２３〕。まず，話し手は伝達したい考えと欲求を持ち，その考えを形作り，その言語の意味組織に合致するようにしなければならず，ここでは語いと意味とが問題の中心となる。そして，自分の考えを表現する意味組織を見出したら，その言語特有の方法で配列しなければならず，それには形態素から語い・句・節，さらに文に至るまで全ての文法単位の記号化が働く。そして，次にそれを音韻の単位である音素に変えなければならず，ここでは音韻全般 ── ただ単に個々の発音のみではなく，リズム・イントネーションなどのかぶせ音素も含むもの ── の選択・実施が中心的な課題である。一方，聞き手のdecodingには，話し手が記号化する時の要素が同様に含まれ，それらが反対の方向に作用し，理解につながって行くと考えられる。このように，話し手のencoding と聞き手のdecoding に共通して，ＩＴ

に含まれる要因には，意味的要素（語い・慣用句），文法的要素（形態・統語），音韻的要素（発音・リズム・イントネーションなど）が存在している。しかし，それらの要素は個々が孤立的に存在しているのではなく，複雑にからまり合ってＩＴを構成していく。

これらの３つの言語的な要素に加えて，ＩＴの達成にとって脈絡(context)の重要性を見逃すことはできない。ここで言う脈絡とは，言語的脈絡（いわゆる「文脈」）と場面的脈絡('situation')の両方を含む全体的なもので，それは聞き手の理解を助け補うものとして働き，ＩＴに対して多大な影響を及ぼす。例えば，ある特定の単語が理解できなくても，前後の文脈や場面との関連から発話の理解は促進されることもある。また，発話の冗長度(redundancy)も聞き手の理解に対して影響を与える要因となる〔６：１３７－１３８〕。さらに，聞き手の側の個人は固定したＩＴを有するのではなく，ＩＴは話し手と聞き手の相互の関係に基づいた変動的なものである。例えば，外国人の発話に慣れたnative speakerや，話し手の文化的背景に精通している場合には，理解が比較的容易である。つまり，低い'threshold of intelligibility'〔３：１３〕を持つと言える。しかし，外国語学習の上では，平均的なレベルのＩＴを採用するのが妥当であろう。

注②

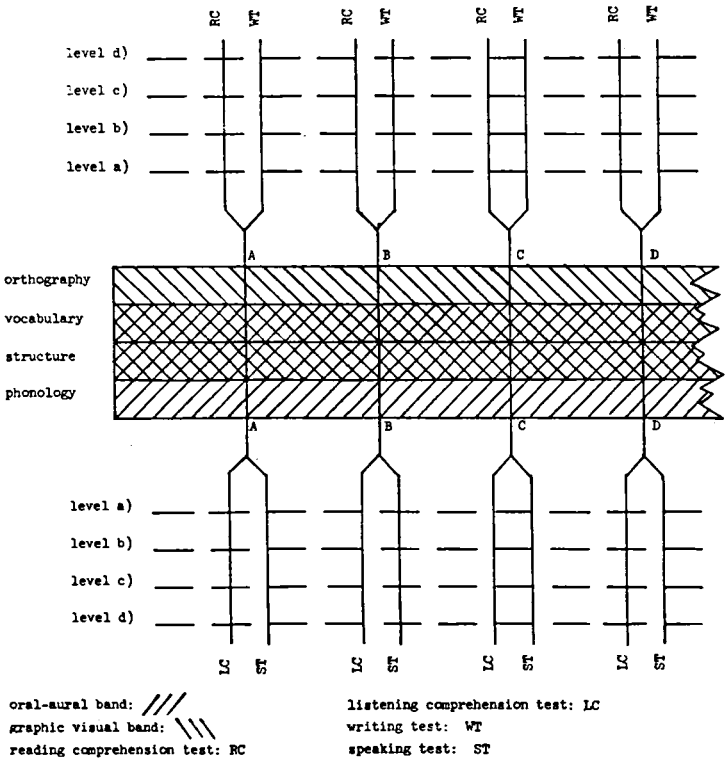

FIG. 1. Criterion-referenced tests to evauate indirect oral and written communication.

〔８：１１２〕

V Communicationの評価の基準としてのIntelligibility

言語活動の達成レベルの１つの基準としてのＩＴは，その指導面に示唆を与えるばかりでなく，全般的なＣＭの能力を評価する場合にも有効な手段となる。すなわち，ＣＭの能力を評価するのに，発音とか文法事項などの比較的些細な誤りは，ＣＭの核心を成す発話の全体的な意味内容を変えない限りにおいて，換言すればＩＴを喪失しない限りにおいて，一応捨象しても差し支えなかろう。それよりも，言われたことの意味が重要性を帯び，それが最終的な評価の基準となり，それは場面と聞き手との脈絡においてのみ測られるものである〔７：１１１－１１２〕。ところが，ＣＭの能力を評価するのにＩＴは１つの有効な目安となるが，一方，テストが全般的な印象の評価になりがちで，客観性に欠け，信頼性の乏しいものになり易いという危険性は免れない。そのような危険性を補正し，生徒の熟達度(proficiency) を客観的に評価するためには，前章で抽出されたＩＴの要因に基づき，まず，音声による場合は語い・構造・音韻，また文字による場合は語い・構造・綴りの各領域での到達レベルを調べた上で，話しことばと書きことばの両面で，４技能に基いたＣＭの能力を評価する必要があろう。注②現行のテストの多くが，言語の側面的現象に関する記憶・再生のような一面的な知的能力しか問題にしていないのに対して，ＣＭの視点から見て，表現・生産の面も統合した形での全体的な言語能力を評価する方向へ向かわなければならない。

Ⅵ おわりに

以上述べたように，ＩＴとは言語活動において到達されるべき限定された基準を示すものであって，決してbroken English で良いという意味ではない。言語活動が目指すＣＭの手段としての言語の使用と自己表現の目標を達成するための１つのアプローチであり，絶えず，正確で完全なるものへの志向がなされなければならないことは言うまでもない。今後，ＩＴの考え方をさらに体系化し，具体化するような研究と努力が要求される。

≪参考文献≫

1. 文部省 『中学校指導書 外国語編』 開隆堂，昭和４５年５月。
2. Abercrombie, David, "Teaching Pronunciation" ELT, 3, 5, 1949.
3. Catford, J.C., "Intelligibility" ELT, 5, 1, 1950.
4. Johnson, F.C., "The Failure of the Discipline of Linguistics in Language Teaching" LL, 19, 3 & 4, 1969.
5. Moulton, W.G., A Linguistic Guide to Language Learning, Modern Language Association of America, 1970.
6. Rivers, W.M., Teaching Foreign-Language Skills, The University of Chicago Press, 1968.
7. Perren, G.E., "Testing Spoken Language: Some Unsolved Problems" Language Testing Symposium: A Psycholinguistic Approach (ed.) Davies, A., Oxford U.P., 1968.
8. Valette, R.M., "Evaluating Oral and Written Communication: Suggestions for an Integrated Testing Program" LL, Special Issue, No. 3, 1968.